ニューズレター　第 121 号・2022 年 3 月

日本カナダ学会　発行人：佐藤信行　編集人：福士 純・竹中豊・岡田健太郎

事務局：〒 162-8473 東京都新宿区市谷本村町 42-8 中央大学法科大学院 佐藤信行研究室気付
TEL:080-3868-1941・FAX:03-6368-3646・http://www.jacs.jp・ jacs@jacs.jp
（電話等の受付：毎週月曜日 10 時～ 12 時及び 13 時～ 17 時　郵便振替口座 00150－2－151600

会長退任にあたって

佐藤 信行

2022 年3月末日をもって、任期満了により、日本カナダ学会会長を退任することとなりました。会員及び関係の皆様には、任期中ご指導・ご協力を賜り、誠にありがとうございました。深く感謝申し上げます。

会長としての2期4年間は、その前後半で「激変」しました。**下村雄紀**前会長から職を引き継いだ 2018 年には神戸国際大学、翌年は鹿児島純心女子大学において、カナダやオーストラリアから基調講演者やゲストをお迎えしての大会が開催できました。他方 COVID-19 の大きな影響を受けた 20 年と 21 年には、日加間の学術関係者往来がほぼ途絶し、大会についても、20 年は大学セミナーハウスを拠点とするハイブリッド型、21 年は筑波・中央両大学のアカウントを利用したほぼ完全オンライン型とせざるを得ませんでした。他学会が大会を中止する中、JACS は上のような研究大会方法を模索し、その社会的責任の一端を果たし得たと考えますが、なお学会活動全体が厳しい状態にあることは否定できません。そこで、以下では自戒と反省を込めて、残された課題の一端をお示ししておきたく存じます。

第1は、研究会・研究大会のあり方です。この2年間の経験は、対面での学術交流の重要性を再確認させる一方で、ICT 利用の新たな可能性も示しました。特にハイブリッド型大会を高度化することで、参加者数増のみならず、基調講演者は来日・対論ゲストはオンライン登壇等といった多様性拡大を図ることも考えられます。

第2は、学会による継続的な研究成果の取纏めです。学術研究は、究極的には個々の研究者が担うものですが、学際性を必須の要素とする地域研究には、組織的取組が不可欠であり、その核の一が学会による研究成果の取纏めです。昨年3月には、久しぶりの JACS 編図書『現代カナダを知るための 60 章【第2版】』が刊行され、オンライン版『カナダ豆事典』編集も現在最終段階にありますが、こうした活動の恒常化が重要と考えます。『カナダ文化事典』刊行

（次ページに続く）

JACS Newsletter No.121（March 2022）// **本号の内容**：会長退任にあたって（佐藤信行）●JACS『ニューズレター』の想い出のことなど（竹中豊）●**リレー連載**:なぜカナダ研究をしているのか（第15 回）:私とカナダ研究（下村雄紀）●**事務局より**（第4回『日本カナダ学会賞』受賞候補作品募集、「トラベル・グラント」募集について、第 35 回『日本カナダ学会研究奨励賞』論文募集、会費納入について（お願い）、日本カナダ学会事務局移転のお知らせ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・●**編集後記**

計画が始動しておりますので、是非、皆さまのご協力をいただきたく存じます。

第3に、人的交流の再開・拡大と、若手研究者の育成です。いかにDX化が進んでも、研究対象国・地域を訪れることなく地域研究に関心を深めることは困難です。とりわけ、若手研究者にとっては、このことは極めて重要です。

幸い、この4月1日には、**岸上伸啓**会員が新会長にご就任くださるほか、私を支えてくださった副会長のお三方が重任されます。引き続きのご支援・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

（日本カナダ学会会長・中央大学）

＊ ＊ ＊

JACS『ニューズレター』の想い出のことなど

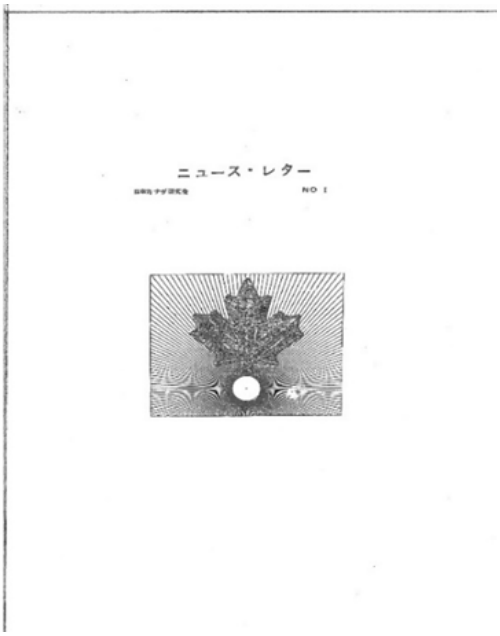
竹中 豊

傲慢なよそよそしさの無い国・・・。昔も今も、私はそんなカナダが大好きだ。こうしてカナダとのお付き合いは、あれこれもう半世紀近くになる。誇大妄想ではないけれど、私の人生はJACSとともに歩んできた、といっても過言でない。そして今、「記憶なしにはけっして先に進めない」とも考えている。懐古趣味にふけるわけでなく、温故知新の知見に倣いつつ、JACSの歴史にも連なる『ニューズレター』の想い出にチョッピリ触れてみたい。

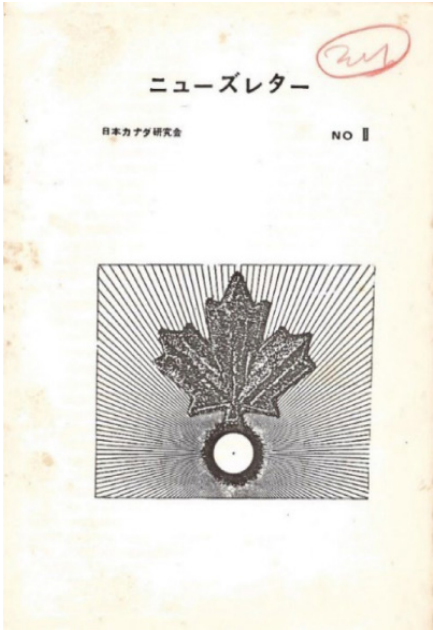
はばかりながら、私は日本カナダ学会発足時のメンバーの一人だった。その経緯といえば、JACSの前身である「日本カナダ研究会」の結成時にさかのぼる。1977年5月、カナダに知的関心のある大学教師を中心とした14名が、東京・経団連会館に集った。要は、日本におけるカナダ研究の促進を目指そう、というものだった。これがJACS誕生のルーツだ。当初の「研究会」は、やがて会員数の増大にともない、同年12月に初の研究大会（於・東京の国際文化会館）開催にまでこぎつけることができた。駐日カナダ大使の来賓・スピーチもあり、大会参加者は延べ100名近かったろうか。ともかくすごく熱気を帯びていたのをよく覚えている。そして翌1978年には名称も「研究会」から「日本カナダ学会」へと“格上げ”し、名実ともに学術団体として船出していく。

JACSの目的は、もちろん日本におけるカナダ研究の振興・奨励・人物交流などにあるが、誕生当初、まずは『ニューズレター』の刊行が急務だった。そして初代編集責任者として、結果的には足掛け4年、私が担うことになった。当時の私は、学会活動の右も左もわからず、ましてや編集経験ゼロの素人もいいところ。ただ幸い、創設時のメンバーで編集経験の豊富な**大熊忠之**会員（当時・日本国際問題研究所／後・広島修道大学）がいたお陰で、大いに助けられた。

ちなみに、『ニュース・レター』（当時のママ）の創刊号を見てみよう。1977年11月発行でB5版・8頁。掲載記事は、「日本カナダ研究会の発足にあたって―門戸を広く、多様な関心をとり込んでほしい―」（中川文雄・筑波大学）、「カナダ研究ノート」（岡本民夫・熊本商科大学）、書評2点「『カナダ経済入門』I.M.ドラモンド著、公文俊平・長尾史郎訳、日本経済新聞社」（飯澤英昭・山形大学）および「『カナダの歴史』K.マクノート著、馬場伸也監訳、ミネルヴァ書房」（竹中豊・文化学院）、「日本カナダ研究会・設立準備会の報告」（大原祐子・東京大学）、そして「第1回日本カナダ研究会開催のお知らせ」だった。懐かしい名前が並ぶ（所属はいずれも当時）。以後、8頁版がほぼ定番となる。ご参考までに初期の表紙および題字イラストをご覧ください。



創刊号 (1977 年 11 月) の表紙。題字に注意。



第２号（1978 年３月）の表紙。赤字は筆者のメモ。

第３号より表紙をなくし、４号からは題字を大きくした。

なお、個人情報に敏感な現代からみて隔世の感がするのは、巻末の編集責任者欄に、私個人の住所と電話番号が毎号記されていたことだ。我ながら今思うとギョッとするが、これは第5号（1980 年２月）まで続く。長閑な時代だった、というべきか。

手元にある『ニューズレター』のバックナンバーを読み直してみて、あくまで私見のレベルだとお断りしたうえで、いくつか感じたことがある。第一に、もっとも印象に残っているひとつは、1979 年８月 31 日から３日間、東京・八王子にある大学セミナーハウスで開催された日加修好 50 周年を記念する日加学術会議に関する記事だ（第５号、1980 年２月、“日加学術会議を終えて”、飯野正子・津田塾大学）。会議自体は、「カナダ史の特質を探る」、「日加関係の展開」、「カナダ社会と文学」、「カナダ日本人移民の歴史と態様」、「国際経済と日加協力」という5つのセッションで実施された。現在でも興味をひく内容だった。同記事は、こうした内容を見事に整理しているのみならず、その後のカナダ研究の方向性や視点を鋭く洞察していたからである。今読んでも「なるほど」と思う点が多いのには驚く。

第二に、『ニューズレター』の役割は情報提供が基本とはいえ、いささかの贔屓（ひいき）目を

おゆるし願えれば、会員によるカナダ研究をめぐる多様なエッセイの面白さだ。JACSは学際組織であるがゆえに、専門分野を異にする人たちの筆致や発想は、時には刺激的でさえある。一見、短くて軽い読みもののように思えるが、総じてなかなかの出来で、質的に優れているとの印象だ。ベテランのみならず、若手の研究者からも学ぶ点が多かった。これはけっしてお世辞でなく、私のみならず編集にかかわった者たちの実感であろう。限られた字数で、かつ専門外の人にもわかりやすく書くというのは、実は難しい知的作業だからだ。

そして第三は、『ニューズレター』編集を通して、非常にはっきりと見えてきた事実がある。それは、分野を問わず優れた女性研究者が増えてきたことだ。たとえば1979年当時、前述の日加学術会議では女性の報告者・討論者はいなかった。さすがに一人の出席者（女性）から批判の声があがったが、それに対し**馬場伸也**会長（津田塾大学）はこう述べたのだった。「この学会では、男女の差ではなく、各分野における研究上の貢献度によって報告者や討論者が決定された」と。その後のカナダ研究にかかわる女性研究者の活躍と発展ぶりを見ると、馬場先生の言葉の裏に、実は将来を見通す視点が隠されていたのだな、と感じている。

最後になるが、縁があって私は2017年から『ニューズレター』の**福士純**・編集人のもとで、編集を再度お手伝いをすることになった。時代は紙媒体から電子媒体に移り、レイアウトや校正といったハード面では驚くほど大きく「変化」していた。しかしソフト面、すなわち多様で知的センスの良い記事の掲載という点では、今後もどうか「変わらぬまま」であってほしい。編集委員を今号で退任させていただく者として、小癪（こしゃく）ながらもこれは、“後輩”への強い思いである。

結局、『ニューズレター』の使命とは、カナダ研究に関わる情報提供だけでなく、＜Creative Imagination＞に連なるヒントを、さりげなく会員諸氏にお届けすることではないか、と考えている。

（元カリタス女子短期大学）

＊　＊　＊

＜リレー連載＞

なぜカナダ研究をしているのか（第15回）

私とカナダ研究

下村　雄紀

私とカナダの関係は、1975年の夏に博多から佐世保まで帰郷する列車の中でのカナダ人との出会いにはじまる。その人は教育大学の学生で日本の陶器に興味があり、各地を訪ねて旅をしているとのことであった。車内で不躾に話し掛けたのは、有田焼の流れをくむ焼き物の里である波佐見が私の父の故郷であったことから、多少陶器を紹介できたからではあったが、その年の8月末にアメリカ留学が決まっていた私にとってそれ以上に同年代の若者と英語で話す機会に飢えていたからであろう。

9月に始まった私の留学生活ではあったが、初めてカナダの地を踏んだのは、1975年の冬のことであった。冬休みには大学寮が閉じられ、頼るべき友人とてなかった私が長距離バスに揺られて唯一の「知人？」として僅かな時間を過ごしたに過ぎない教育大生を訪ねた地が氷と雪のトロントであった。相手にとっては迷惑なことであったろうが、これが私とカナダとの最初の出会いである。たった数日間の訪問でしかなかったが、九州育ちの私にとっては、市庁舎前の氷の張った泉水の上を滑っている子供たちが醸し出す日常的な風情や積雪の上にどこまでも延びる二本のレール跡など、その後も私の記憶に深く刻まれることになった。ただ、その学生がユダヤ系カナダ人

であり、友人として紹介された人がイタリア系であったことやヤング通りにはアジア人街が存在したことで、カナダ（少なくともトロント）が多民族で多様な社会であることを肌で感じたのは事実である。

その後ナイアガラ瀑布など在米中も何度かカナダを旅しているが、専攻がアメリカ経済史であったことから、カナダ研究と濃密な関係を築くには至らなかった。カナダとの第二の関係ができたのは、そのずっと後の 1983 年頃になる。前年にアメリカから帰国していた私が非常勤講師をしていた大学での故**佐々木敏二**氏との出会いであった。当時、関西における日系移民研究はアメリカ移民を中心とした同志社大学人文科学研究所の「海外移民とキリスト教会」研究会が担っていた。佐々木氏に誘われるようにして、私は研究会のフェローとして末席に加わったのが移民研究に携わる機縁となったのである。研究グループの中で、カナダへの移民研究の必要性を訴えたのが佐々木氏であった。その理由は、同氏がカナダでの生活経験をもつ生物学者であり政治家であった山本宣治の研究家であったことと、居を構えていたのが滋賀県であったことと関係がある。滋賀県は和歌山県と並んで、カナダに多くの移民を輩出した出移民県である。県庁もカナダの滋賀県人会との絆を貴重なものとして活発な関係維持に努めていた（1986 年に出版された川崎愛作氏で県が出版元となった『海を渡った近江の人たち－滋賀県海外移住史』がある）し、県内の資料収集も県立図書館を中心に進められていたのであり、佐々木氏もその一旦を担われていたのである。

その他に、立命館大学の**谷岡武雄**氏を中心としたグループが提唱した「湖東移民」研究が存在しており、その後の滋賀県人カナダ移民の地理学的研究の発展の端緒となった。同志社のキリスト教研究会でのアメリカ移民研究が『北米キリスト教運動史』として成果をまとめあげた後に、その流れを組むべく立命館大学国際言語文化研究所に文学を中心とする日系文化研究会（故**山本岩夫**氏）が発足し、私もその研究会に参加した。同大学は関西における移民研究の研究拠点のひとつとして今日でも活動は継続されている。

カナダ移民研究をはじめるにあたって佐々木氏と私が問題としたのは、日系カナダ移民研究に関しては、日本側の一次資料に対して、カナダ側の資料が著しく欠如していたことであった。太平洋を跨ぐ両方の資料を一体化させなければ、日本における日系カナダ研究に発展性はないではないかとの思いを共有したことにあった。外交史料館などでの和歌山県移民と滋賀県移民の基礎調査を終えていたことから、カナダ側の資料発掘こそ今後の研究に不可欠であると考えたのである。1993 年にはじまる日系カナダ移民資料発掘の旅はこうして始まり、カナダ研究出版助成（Faculty Research Award）と神戸国際大学研究助成を得て 1998 年まで続くことになる。

資料発掘に関しては、ヴァンクーヴァーでは故**ゴードン・門田**氏とブリティッシュ・コロンビア大学アジア図書館の Centre for Japanese Research の**権並恒治**氏、ウィニペグとエドモントンでは当時文化担当領事であった**原口邦紘**会員の協力を得て、強制移住の間に喪失したと思われていた多くの資料を収集することができたのである。この成果は後に『カナダ移民史資料』として出版されている。これらの資料は、その後の日系カナダ人研究者にとって基礎資料となったと確信している。研究としては、佐々木氏との共著である「カナダ日本人初期移民の定住過程」（立命館言語文化研究）などがあるが、戦前のヴァンクーヴァーの日本人街を資料に基づいて再構築した「戦前ヴァンクーヴァーにおける日本人街の発展過程」（神戸国際大学紀要）は、この種の資料としてははじめてであった。その後日系カナダ人自身による記録創りが Nikkei National

Museum and Cultural Centre などで「記憶による記録」が進んでいる。

私のカナダ学会との関係は、1980 年代後半に学会に参加したことにはじまる。上述した資料発掘は学会の支援なしには考えられない。また、優れた若手研究者であった**和泉真澄**会員の貢献もあり、リドレス運動を描いた**ロイ・ミキ**と**カサンドラ・コバヤシ**著の『正された歴史―日系カナダ人に対する謝罪と補償―』の翻訳出版（1995 年度カナダ首相出版賞翻訳部門特別賞）ができたことは、カナダ政府と学会による研究助成の賜物であったと考えている。

その後、**杉本公彦**会長の下で厚かましくも副会長を務め、それを引き継ぐ形で会長職を仰せつかったが、当時の最大の問題はカナダ政府からの支援を失って、独立した研究学会として再起することであった。厳しい財政の見直しや規模の縮小を余儀なくされたことへの批判もあったが、学会として存続する最低線を維持できたと自負している。私個人が抱いていたもうひとつの問題意識は、**竹中豊**会員が設立から長く務められたカナダ研究国際協議会（ICCS: International Council for Canadian Studies）の日本代表を同氏から受け継いだことが発端となっている。その頃までには、日本のカナダ研究には多くの優れた研究者が存在しているにもかかわらず、**飯野正子**会員（1998 年度国際カナダ研究カナダ総督賞受賞）以外、国外ではあまり知られていないことへの驚きであった。当時、ICCS が授与していた研究賞の対象となっていたのは、ほとんどが欧米の研究者であり、アジア圏からの受賞者は皆無に等しかったのである。その意味で本年度の Pierre Savard Awards が日本の研究書に与えられたことは、何にも増して嬉しい限りであり、ICCS 担当理事の**矢頭典枝**会員のご努力に感謝したい。さらに、海外のカナダ研究者と日本カナダ学会との関係強化も重要との考えから、若手研究者育成を目指した Pacific Asia Network of Canadian Studies（PANCS）に積極参加したのも次世代研究者の国際化を意図したものであったのである。その意味で国立民族博物館のご理解を得て、学会の年次大会と並行して開催された PANCS 会議は日本におけるカナダ研究を国外に知ってもらう好機ともなった。しかし、カナダ政府の研究に対する方針転換の煽りで、PANCS の活動が実質停止してしまったことは、残念である。

もうひとつの私の懸案事項は、優れた研究書に対して分野別の評価はあっても、学会としてその価値を認め、広く広報する手段を失っていたことにあった。カナダ首相出版賞が廃止されて以来、「日本カナダ学会賞」の新設は私個人のみならず、学会全体が共有した念願であったと思っている。第 1 回学会賞は**細川道久**会員の『カナダの自立と北大西洋世界』に、第 2 回の特別賞（翻訳部門）には**堤稔子**／**大矢タカヤス**／**佐藤アヤ子**日本語版監修の『ケンブリッジ版　カナダ文学史』と**丹羽卓**監訳の『間文化主義－多文化共生の新しい可能性－』、第 3 回は上述の和泉会員の『日系カナダ人の移動と運動』にそれぞれ贈られている。この賞の特徴は学会の枠を超えて広く人文・社会科学分野におけるカナダ研究に対してのものであり、カナダ学会がカナダ研究の広範な普及を目指しているところにある。今後の更なる発展を望むものである。

小規模大学で退職するまで教育と行政に追われる歳月であった私にとって、カナダ研究は辛うじて研究者の端くれであることを許してくれた「ゆりかご」であった。これまでに出会った多くの忘れえぬ人々、現在そしてこれからも私を寛容に受け入れてくださる人々に感謝するばかりである。今後もカナダ研究に携わっていきたいと願っているが、同時にこれまでとは異なった視点で日本におけるカナダ研究の発展の証人であり続けたいと望んでいる。

（元日本カナダ学会会長・元神戸国際大学）

(((事務局より)))

【第４回『日本カナダ学会賞』受賞候補作品募集】

日本カナダ学会賞は、日本におけるカナダ研究の優れた成果を顕彰し、カナダ研究の発展に資することを目的として、カナダに関する優れた邦語書籍及びその著者に対して授与する学術賞として、日本カナダ学会が 2014 年 10 月に創設しました。この度、第4回受賞候補作品を募集します。皆様からのご応募・ご推薦をお待ちしています。**(1) 対象作品**：①カナダに関する邦語書籍（学術書、翻訳書、啓蒙書等)。固有のISBNを有するもの、②全体の 8 割以上が日本語で記述されているもの（ただし、日本語と他言語で同一の内容を記述されているものである場合には、日本語で記述されている割合が、全体を記述言語数で除した割合以上であること)、③ 2020 年 1 月 1 日から 2021 年 12 月 31 日までの間に刊行されたもの。**(2) 審査**：日本カナダ学会賞委員会において審査を行います。推薦者（自薦・他薦可）は、該当書籍 2 冊と推薦書（自由形式、A4・1 枚以内）を添えて、郵送により、ご応募ください。なお、応募書類・当該図書は返却致しませんので、あらかじめご了承ください。(3) 応募期間：2022 年 4 月 1 日～ 5 月 2 日（必着)。**(4) 提出先**：日本カナダ学会事務局まで。**(5) 受賞作品の発表及び表彰**：受賞作品の発表及び表彰式を、9 月に開催される第 47 回年次研究大会で行う。受賞作品の著者に対し、正賞（授与記）と副賞（賞金 10 万円、翻訳書の場合賞金 8 万円）を贈呈。**(6) 問い合わせ**：電子メールにて事務局まで。

【「トラベル・グラント」募集について】

2022 年度（2022 年 4 月 1 日 ～ 2023 年 3 月 31 日）までの間に、カナダおよびカナダ以外の国（日本を除く）で開催される国際会議などでカナダ研究について報告をする本学会会員に旅費一部補助の制度です。本学会会員によるカナダ研究の成果を広く海外に発信し、研究の交流や国際化を図るのが目的です。ただし、トラベル・グラントは旅費の一部を補助するのが趣旨ですので、旅費のすべてをカバーするものではありません。募集要項は次のとおりです。**(1) 支給人数と支給金額**：1 名につき 5 万円・最大 2 名。**(2) 支給対象者**：募集時点において日本カナダ学会会員であること。原則として、専任の勤務先を持たない会員。専任の勤務先を持つ会員でも応募出来ますが、優先度は低くなります。 **(3) 応募書類**：①本学会所定の応募用紙（日本カナダ学会のホームページに掲載)、②国際会議などでの報告が正式に受け入れられたという文書(メールも可)、③出張に関する費用（航空運賃、滞在費、参加登録料など）の見積書。**(4) 出張後の義務**：①帰国後 2 週間以内に報告した論文を、郵送にて学会事務局に提出すること。②出張に関わる費用の報告書(学会ホームページ掲載の所定の書式)。**(5) その他の事項**：①当該年度内でトラベル・グラントの予算額（10 万円）が満額執行されなかった場合でも、原則として、残額を次年度への繰越は行いません。②出張期間は当該年度内に終了しなければなりません。③このグラントを支給された会員は、原則として再度応募することはできません。**(6) 審査方法**：日本カナダ学会理事会における審査機関（対外交流・社会連携委員会）により事前審査を行い、それぞれ 5 月および 9 月の理事会にて最終決定します。**(7) 応募締切日**： 2022 年 4 月末日および同年 8 月末日（年 2 回)。**(8) 提出先**：日本カ

ナダ学会事務局まで。**(9) 問い合わせ**：電子メールにて事務局まで。

【第35回『日本カナダ学会研究奨励賞』論文募集】

日本におけるカナダ研究の促進と育成を目的として、優れた研究論文を募集します。**(1) 応募要件**：カナダ研究に関する論文で、応募締切日より起算して過去一年以内に発表されたか、未発表のもの。テーマや領域は問わない。用語は日本語・英語・仏語のいずれか。**(2) 応募資格**：日本国民又は日本在住者であって、応募締切日において次のいずれかに該当する者、(a) 大学院に在学している者、(b) 大学院を修了又は退学してから5年未満の者、(c) 満40歳未満の者。**(3) 原稿枚数**：邦文は横書きで400字×80枚相当を上限とする（含・図表／脚注）。A4判ワープロ仕上げが望ましい。欧文は15,000語以内（含・図表／脚注）＝A4判ダブルスペース。いずれの場合も1論文につき、コピー2部（正副合計3部）を送付すること。著者名、論文名、所属、略歴、連絡先（郵便及び電子メール）をカヴァーレターに明記すること。また、応募書類は返却しない。**(4) 論文の推薦**：応募要件に該当する既発表論文について、執筆者が応募した場合のほか、学会理事が推薦した場合、これを他薦の審査対象論文として取り扱う。**(5) 締切**：2022年5月31日（必着）。**(6) 送付先**：日本カナダ学会事務局まで。**(7) 賞・賞金・特典**：最優秀論文賞1名に正賞および副賞（5万円）。優秀論文賞（佳作）2～3名に正賞および副賞（2万円）。なお最優秀論文賞の受賞論文は、未発表のものに限り、規定に基づいてカナダ研究年報に掲載することができる。**(8) 発表および授賞式**：2022年9月、第47回年次研究大会にて。**(9) 問い合わせ**：電子メールにて事務局まで。

【会費納入について（お願い）】

現在会費の納入を受け付けております。また、前年度までの会費を未納の方は、直ちに納入下さい。過去3年分（当該年度を含まず）の会費が未納の場合、学会からの発送物停止等をもって会員資格を失うことになりますのでご注意下さい。**一般会員：7,000円・学生会員：3,000円**（学生会員は、当該年度の学生証のコピーを提出のこと）。**郵便振替口座**：00150-2-151600。加入者名：日本カナダ学会。他金融機関からの振込の場合は、口座番号：ゆうちょ銀行 〇一九（ｾﾞﾛｲﾁｷｭｳ）店 当座 0151600 ニホンカナダガツカイ。来年度以降、自動振替に移行希望の方は事務局までご連絡ください。必要書類をお送りします（自動振替による口座引落は7月です）。ご協力願います。なお会員区分の変更のある場合は直ちに事務局までお知らせ下さい。

【日本カナダ学会事務局移転のお知らせ】

2022年4月より以下のとおり移転いたします。

〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10－1 国立民族学博物館 岸上研究室気付 日本カナダ学会事務局
電話：06-6878-8255
E-mail：jacs@jacs.jp

業務時間：当面不定期ですので、電子メールでご連絡くださいますようお願いいたします。事務局より折り返しご連絡申し上げます。

＊ ＊ ＊

★編集後記・・・本号をもって長らくニューズレターの編集人を務められた竹中豊先生が勇退されます。残る編集人二人は、思えば大学院修士の頃から20年以上（！）、先生のお世話になってきました。竹中先生の新たな出発を祈念します。これまでありがとうございました。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(O)